学校で「がん教育」が始まっています
～がんを理解し、がんと共に生きる社会をつくる～

市医師会と市民病院の医師が、
市内小中学校で「がん教育」を行なっています

「がん教育」とは

全国の学校で「がん教育」が行われるようになった事をご存知ですか?

文部科学省が学習指導要領に「がん教育」を明記し、令和2年度から4年度にかけて段階的に全国すべての小学校、中学校、高等学校で「がん教育」の授業が行われることになりました。津島市では、平成30年から一部の学校でモデル授業を開始し、令和3年度は市内の全小中学校で授業が行われました。

なぜ「がん教育」が必要か

「がん」は死因のトップであり、一生のうちに2人に1人ががんになると言われるほど、当たり前の病気になっています。でも、私たちがイメージする「がん」は、得体の知れない恐ろしい病気だったり、科学的な根拠に乏しい話だったりするかも知れません。しかし今では、生活習慣を改めることで発症リスクを抑えられることが分かってきました。医学の進歩により、がんの60%が治る病気になり、さらに検診で早期に発見・治療すれば90%が治る病気になってきました。ステージⅣ(治ることが難しい病状)でも5年生存率は20%以上になってきています。「不治の病」から「共に生きていく病気」に変わってきているのです。

だからこそ、共に生きて行く相手「がん」について知ることはとても大切です。しかし、私たち大人でもどれだけの事を理解しているでしょうか。

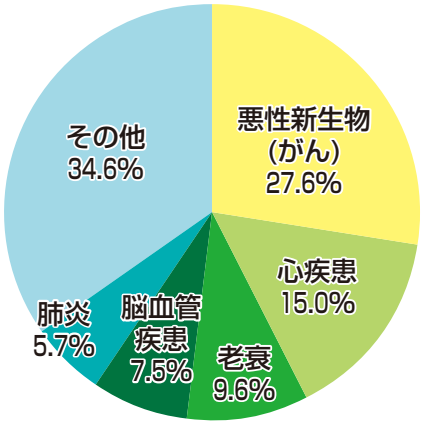
「がん教育」必修化

小学校	中学校	高等学校
令和2年度	令和3年度	令和4年度

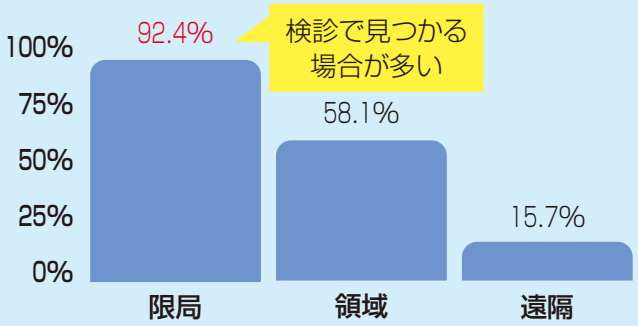
目的

がんについての正しい理解と、がん患者や家族などのがんと向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る

日本人の死因順位別構成割合
(出典:2020年厚生労働省統計)



臨床進行度別5年相対生存率(出典:国立研究開発法人国立がん研究センター)



「5年相対生存率」とは
がんと診断された人のうち5年後に生存している人の割合
(がんが治った、あるいは治療中の人)

※限局:がんが発生した臓器だけにとどまっている段階
領域:がんが周りの臓器やリンパ節に広がっている段階
遠隔:がんが遠く離れた臓器まで広がっている段階